
7TH DRAGON 2020 ANOTHER DAYS

霊宮空刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7TH DRAGON 2020 ANOTHER DAYS

【Nコード】

N0400Z

【作者名】

霊宮空刀

【あらすじ】

一人の少年がいた。その少年は剣を取り、竜を狩りつくしていく。
今日も……

初めに

注意！！

この作品には『主人公チート。しかし度合いがとてつもない』と『登場人物少なすぎる』と『設定を借りているだけ』の三つがあります！なお、主人公チートは魔物、ドラゴン、帝竜などと戦う為のチートです。それでも人類最強なのですが。

チートの度合い　クウガタイタン＋クウガドラゴン＋クウガアルティメットのいいところを全部足した感じです。

登場人物の少なさは、作中で人類を主人公以外・・・・・・・・の予定なので少ないのです。

設定を借りているだけは、そもそもムラクモ機関がでず、SKYなどの組織もません。そこを注意して読んでください。

それでは、どうぞ

FIRST DAYS (前書き)

第一章OP「雷鳴アンプリファ」

空也戦闘時BGM「烈風の証」wind and blaze

FIRST DAYS

「面白くな～な」

そうつぶやいたのは、主人公でもある朝霧空也。空也は屋上で寝そべりながら空を見上げていた。しかし、彼の視界に不自然なものが映った。

「な、何だよこれ・・・？」

空也の手にはセブンスドラゴン2020本編でサムライが手に入れることのできる武器、千鳥が握られていた。それを一回引き抜くと、空也が地面に膝をつく

「な、なんだよこれ・・・何が・・・流れ込んで・・・ぐう・・・」

瞬間、空也はぶつ倒れた。しかしすぐに起き上がると千鳥を鞘にしまい、服のベルトに挟み込んだ。だがすぐに空也は両手で頭を押さえこみその場にうずくまる

「はい・・・って・・・くる・・・なあ！！！！！！」

そう叫ぶと頭を一気に振って何かを取るよう動く。そして空也はその場に座り込むと息を荒げながら空を見上げる。その真上を何百匹もの竜が通り過ぎて行った。竜が通り過ぎた後には赤い花が大量に咲き乱れ、空也の周りを包み込む。さらに竜は街を襲撃し、次々に人間を惨殺していった。

「何なんだよ！？日本刀が落ちてきて乗っ取られかけて、拳銃の果てには日本滅亡か！？夢だと信じたいぜ！」

空也は1秒で屋上から降りる階段へ走り込むと、わずかな時間でグラウンドまでついていて、その時に彼が見た光景は凄惨な者だった。人の死体は食いちぎられて、身体の臓器が露出し、首から上がない死体もあつた。普通の完成なら嘔吐する者もいる。それと同じように空也は

「う・・・おえええ！！！！！」

その場で嘔吐し、千鳥を杖にしながらふらふらと立っていた。その間にも学校の生徒は喰い殺されていて、空也一人では何もできない状況になっていた。空也は無言でその場から駆け出すと、走りながらこう考える

「（夢で・・・夢であつてくれ！！！！こんな悪夢・・・こりこりだ！！！！）」

そう考えながら走り、自分の家へと飛び込む。

「うう・・・夢・・・だよな、夢、だよ・・・なあ・・・」

自分を殴ったりつねったりしながら空也は夢であることにしようとしたが、悲しくもそれは現実だった。空也はそれを確認しながら、千鳥を握りしめ、また置くと言った

「・・・・・・・・仕方ない・・・・・・・・これが現実なら・・・・・・・・受け入れるしか・・・・・・・・ない」

そう言つて汚れた服を脱ぎ捨て、水色の服を着、ズボンをはき、フ
ードをかぶるところつぶやいた。それはこれからの戦いの始まりを
示す合図でもあり、同時に空也の終らない戦いを始める言葉でもあ
った

「竜を、狩りつくしてやる！！！！」

そう言つて千鳥を抜刀すると、トンボ斬りという技で家の壁をふつ
飛ばし、そして近くに居たタワードラグの上に飛び降りると、タワ
ードラグの頭を突き刺して絶命させる。それをみたドラグライアー
ンが風切羽で攻撃してくるが空也はそれをよけるとドラグライアー
ンに袈裟切りを行い、ドラグライアーンを一刀両断する

「（何だ……まるで歴戦の兵士の戦い方が染みついている？）」

そう考えて少し隙が来ると、デストロイドラグの拳が空也の体に入
った

「ぐはあ！！」

空也は吹っ飛ばされて、身体がぐちゃぐちゃになってつぶれるかと思
いきや、飛ばされた先の電柱に足をつけると、衝撃を利用してデ
ストロイドラグまで迫りながら刀を居合の形にし、フブキ討ちと言
う技を使用してデストロイドラグを凍りつかせる。さらに抜刀して
斬り、デストロイドラグを真つ二つにする

「（俺……こんなに身体が強靱か？それに変な技まで使いこなし
ているし……）」

空也は変わった自分に疑問を抱きつつも、その場にいた残りの竜・

・リトルドラグ3体を軽く切り刻むと、千鳥を鞘に収めながら歩き始める。その道には、何が待っているのかは定かではない。そして、それを見ている一人の少女がいた

「・・・・・・・・・・」

ドレスを着ていて、緑色の髪にツインテールの少女が、空也の走りさって言った先を見、また自分も空也を追いかけるようにして走って行った。そのあとにはドラゴンが2体ほど来ていてあの少女を探しているようにも見えた

FIRST DAYS (後書き)

登場ドラゴン

タワードラゲ

足が異常に長いドラゴン。毒系の技を使う

ドラグライアーン

飛行する至って小さいドラゴン。だがつんざく羽音などで混乱させ、混乱している隙に相手を攻撃するドラゴン

リトルドラゲ

まだまだ小さいドラゴン。他のドラゴンと違いそれほど強くはない
デストロイドドラゲ

大きく、強そうなドラゴンで人型に近い、拳にメリケンサックのようなものをはめており、その拳から放たれるパンチは常人なら即死する。また、ジャンプキックも相当の強さを誇る

登場武器

千鳥

サムライが使える武器で、物語の都庁改修とある条件をクリアすると手に入る武器

修正&増量

朝霧空也 〔ASAGIRI KUUYA〕

名前：朝霧空也

性別：男

年齢：17

容姿：公式サイトのサイキック男

性格：良くも悪くも普通の人間。しかし、千鳥から流れたものではあるものの戦闘では冷静な事を考えることが可能で、激高することもない

武器：サムライ専用武器『千鳥』

説明：至って普通の生活をしていた高校二年生であり、日常に退屈していた。成績はとても優秀であり、将来も期待されていたが面白みを探していたところで千鳥を手にして、魔物、ドラゴン、帝竜に戦いに巻き込まれることとなる。空也の存在は特別らしく、謎の少女などにそう言われて行くこととなる。友達はほとんどいないらしく、家族ともぎこちない関係が続いている。ちなみに両親のほかに自分と同じくらいできがよく、言うことをよく聞く妹が存在する。空也曰く「奴隷」らしい

FIRST DAYS 2

空也はドラゴンとの戦闘での疲労を回復するために廃墟となったネットカフェに居た。そこでまだ仕えそうなパソコンで情報を収集しようとする、いくつかのことが分かった。

「一つ目は、日本、アメリカ、中国にしか侵攻していないことか・・・」

ドラゴンはどうやら日本とアメリカと中国にしか侵攻していないらしく、共通点も何もないのではかの国は混乱しているらしい。特に襲われた国の近くにある国の中には、攻め入るうとしている国もあるらしく気が抜けない状態らしい。

「二つ目にドラゴンは無意味に人を殺すってことだけか」

空也は生存本能だと片付けると、次のサイトへとジャンプする。そこには面白い情報が載っていた

「なにになに・・・はあ？『狩る者』？なんだそりゃ」

面白そうだが関係ないと空也は斬り捨て、パソコンの電源を切る。

「日本で生き残っている人間はいないに等しいと考えてもいいころ合いかな・・・？」

日本は国土が狭いため、移動速度の速いドラゴンが大量にいればすぐに北海道や沖縄まで侵攻し、人を殺しているに違いないと空也は考え、今は国外にわたることを検討している

「でもなあ・・・ジェット機の運転・・・・・・・・できるわ」

どうやら記憶の中にはジェット機やヘリコプターなどの運転方法もあつたらしく、空也は近くの『羽山空港』へ行くことを決意し、ネットカフェを出た。その途中に、壊れていないバイクを発見した

「うーん・・・燃料も満タンだし・・・足に使わせて貰うか」

そう言つてエンジンをふかすと、その場からフルスピードで走り出す。しばらく走っていると目の前にいろいろな異形がいた

「ちい・・・やっぱりドラゴンっぽい魔物がいるな・・・あれ？魔物？なんで名前知ってるんだ。まあいいや」

そして空也は千鳥を引き抜くと、魔物がいる場所の横すれすれをすれ違いざまに何回も切り裂き、その場から走り去る。そして、羽山空港に着くと、そこはもはや空港の原型をとどめていなかった。そう、空港の滑走路には飛行機が何個もくつつきながら上をのぼり、それを空港内からでたエスカレーターが繋がり、空港内につながっているという最悪な状態であつた

「うわお・・・とりあえずあの飛行機橋から行きますか」

そう言つてバイクに乗り、一番下の飛行機にバイクごとジャンプして乗つたかと、そこから上まで一気に走りだした。しかし、途中に大砲が何個も設置されていた

「なんd・・・うわ！！！！あぶねえな・・・」

間一髪、バイクからジャンプして飛行機の上に着地することでそれをよけると、バイクは大砲から放たれた電磁砲により破壊された。

「これをどうやって突破するか・・・なあ・・・」

FIRST DAYS 2 (後書き)

注意、これはジゴワットダンジョンを元にしております

FIRST DAYS 3 (前書き)

帝竜はとある七つの国に1匹ずついます

日本・・・ジゴワットみたいに

ちなみに他の飛行機のような上に行く橋の周りには磁力で浮いている鉄のパネル？があつてその上に電磁砲があります

FIRST DAYS 3

「どうすつかな。動いても電磁砲に撃たれるしこのままでも撃たれるし・・・あ、そうだ」

空也はそういつて千鳥を構えると、トンボ斬りを近い電磁砲に一つ放つと、電磁砲が爆発した。と同時に残りの5つの電磁砲が一斉に空也を向く。そして空也が上空に飛ぶと同時に一斉に電磁砲が発射され、立っていたところの飛行機が爆発し、繋がっている飛行機が次々と爆発していった

「速くないと足場が！！なくなる！！！」

そう言いながらも残っている飛行機を足場にして飛びながら、急いで空港内へと急ぐが、その前に足場である飛行機がすべて爆発し、まっさかさまに空也は落ちていく。が、電磁砲を足場にして何とか空港内へと入り込む。

「うえい・・・こんなに魔物が多いのかよ・・・」

入り込んだ空也の目の前には熊型の魔物や鹿型の魔物、スライム系魔物など多数いた。

「だつたら・・・」

空也は千鳥を鞘にしまうと、一気に走り抜きながら見えない速度で抜刀した鞘にしまう。それを何回も繰り返しながら魔物の群れを抜けた後、鞘と刀でカチリ、と音を鳴らす。そうすると魔物の群れ

がぐらり、と傾き、真つ二つに斬り落とされる

「……………崩し払い」

そして空也は空港の屋上へ行くために、二階まで一飛びで行くと、さらにそこから一飛びで三階まで行くと、そこからトンボ斬りで屋根をふっ飛ばし、そこから屋上へと行く。

「ん？あれは……………そうか……………なるほど、ねえ」

そして空也は千鳥を抜刀して、目の前の……………帝竜『ジゴワット』に千鳥の切っ先を向ける。

「少しお痛がすぎたんじゃねえのか？」

そう言つてジゴワットに突進し、上から袈裟切りに切り裂こうとするが、その前にジゴワットの肩にある電磁砲が空也を狙い、発射されるが、発射された電磁砲を切り裂き、ジゴワットへ一刀両断する。が、そこは帝竜、普通のドラゴンとは格が違い、少し傷がつく程度だった。その傷からは血がにじみ出ているのだが

「うわ……………硬いな……………ここは」

ジゴワットの電磁砲から避けている間に鞘にしまい、電磁砲をよけながらジゴワットに近づくとフブキ討ちで斬る。斬ったところは凍傷になる

「G w a a a a a a a ! ! ! ! !」

ジゴワットは叫びながら電気をチャージする。それを見た空也は「

まずい」とジゴワットから離れながら千鳥を抜刀し、後退する。と同時にジゴワットから超電磁砲が放たれ、当たったところはほとんど焼け落ちた。間一髪空也はそれを避けていたが、千鳥が多少融けてかけていた。

「おいおいおい！！！！これじゃあ……斬れないぞ」

空也はその言いながらも千鳥でジゴワットに近づくと、一気にジゴワットの柔らかい所に突き刺し、引き抜く。

「GYaaaaa
a!!!!!!」

ジゴワットはそう吠え声をあげながら横に倒れ、倒れる前に空也はジゴワットの周りから退避する。そして、ジゴワットの死体は煌めきながら一つの刀へとなった。それは一振りの日本刀で、持ち手は黄色く稲光のように、刀身は何一つ傷も付いていない綺麗な銀色で、鞘は稲妻のような模様が走っていた。

「こいつは・・・千鳥もないし、千鳥が進化したのかな・・・まあいいさ、こいつは『稲光』だ」

さらに空也はジゴワットの死体に近づき

「ふ、お前も強かったな……とりあえず、墓くらいはたてといてやる」

空也拾ったナイフをジゴワットの死体の真ん中に突き刺すと、その場から歩き去り、ジェット機を見つけると乗り込む。そして、あいている滑走路を走りながら次の地

「ドイツへ行くぞ」

ドイツへと向かった。

FIRST DAYS 3 (後書き)

帝竜戦・・・酷過ぎる。あっけない意味でも。そしてジゴワットから出る刀は・・・オリジナルです。

SECOND DAYS (前書き)

第二章OP「狂愛」kyoai」

空也戦闘時BGM「烈風の絆 wind and blaze」

今回はあのドレスの少女がすこし絡む・・・かな？

SECOND DAYS

「あららら・・・酷いなあ」

空也がジェット機から飛び降りると、そこにはとても凄惨な光景だった。人が包丁や棒などを持って殺しあいをしていた。しかも、街全体が樹海のようになっているので恐らく帝竜の仕業だと思われる。

「おっと」

「死ねええ！！！」

そう空也が推測していると、突如一人の男が空也めがけて包丁を振り下ろすが、それを空也は避けて男の持っていた包丁をたたき落とす。男はさらに空也へめちゃくちゃに突っ込んでくるが、空也はそれを避けて男の鳩尾に一撃、痛みで気絶させる。

「こつしたほうが安全・・・じゃないか」

気絶した男は別の・・・おそらく少女と思われるが顔に血がべつとりついて判別が出来ない人間に刺し殺されていた。その人間は空也に向き直り、ばねのようにジャンプしてきた。

「うわお！！おいおい・・・ここに居たら俺まで殺される・・・ま、いいか」

飛んできた人間の背骨を的確に折りながら空也はそう言った。さらに飛びかかってくる男を拾った包丁で串刺しにし、別の人間に男の

死体を投げつける。それを棒でたたき落としながら別の人間は空也に飛びかかるがそれを後にジャンプしながら回転することで避けると、包丁を投げつけて殺す。そうしながら空也は街の大通りから一旦離れると、裏路地で一息ついた

「ふう・・・一体どんな帝竜なんだよ・・・？なんで俺、あのジゴワットとかいう竜が帝竜で、ここがこんなになったことが帝竜の仕業だってわかるんだろぅな・・・？躊躇なく人を殺していたし・・・」

その時、空也は人の気配を感じて身構えると、そこにはドレスを着たかわいい少女がいた。

「お前・・・帝竜の影響を受けていないのは何故だ？」

警戒を緩めずに空也は稲光に手をかけると、その手が動かなくなった

「！？なんだこれ！？手前か！！」

「そうだけど・・・そんなに警戒しなくてもいいと思うけど・・・」

空也は動かない手をそのままにしながら少女に問いかける。少女は動かない手の事を自分でやったという、そのまま空也に一步近づいた

「・・・ま、信じてみるか」

「ありがとう」

そう言って空也は警戒を解くと、少女は少し緊張していたのか顔が

少し緩んでいる。それを少女はあわてて直すと

「とりあえず・・・貴方はここに居る帝竜を倒さなくちゃいけないの。いえ、貴方はこの世界にいるドラゴンをすべて倒さなきゃいけない・・・それが貴方・・・『狩る者』の使命だから」

「狩る者？なんなんだよそれ」

「狩る者って言うのは・・・この星の意思で選ばれた、S級の才能を持つ人間の事。ドラゴンを狩るために生まれた人だけど・・・貴方は少し違うみたいだね・・・？」

少女が狩る者のことについて説明をすると、空也は頭上に？マークを浮かべると、少し考え込んだ。そして頭を上げると

「ま・・・俺はこの武器の前の武器・・・千鳥つつう日本刀を手に入れたら強い力を手にしたって感じなんだよな・・・」

「やっぱり・・・貴方は星の意思みたいなものじゃなくて、なんかこう・・・分からないね」

「分からないことは分からないままでいい。今が今だしな・・・とりあえず、俺はこれから帝竜をぶち殺しに行くが・・・お前はどうかやってここに居て、無事なんだ？」

空也が当たり前のような疑問を持った。今日の前に居る少女は無防備だからである

「それは・・・私が少し特別だからだよ。それじゃあ・・・」

少女はそういうと、光に包まれて消えてしまった

「おい、まで・・・あ、行っちゃったなあ」

空也はそう言いつと、人になれないようにその場を後にした

SECOND DAYS 2 (前書き)

人間との戦闘時BGM「最終鬼畜妹フレンドールS」

スリーピーホロウ戦、2話後ですが

SECOND DAYS 2

謎の少女と別れた空也は、少女と別れた場所からそう遠くない場所にて、多数の人間に囲まれていた。

「（推測だが・・・帝竜のりんぷんで操られているのか？だったらこの帝竜は厄介だな・・・）」

空也はそう推測すると稲光を抜刀するが、それよりも速く周囲の人間が稲光を抑えて抜けないようにし、それ以外の人間が武器を持って空也に襲いかかるうとする

「鬱陶しいなあ」

あいている手で空也はポケットにあるナイフを持つと、本来トリックスターが使える技「タランテラ」でもう片方の人間を、自分の腕ごと殺さないように気をつけながら吹き飛ばすと、稲光を抜刀して周りを一閃、人間を次々に切り裂いていく。

「オラ、よ！！」

さらに空也は地面を蹴って飛び上がり、空中からのトンボ斬りで地面を振動させ、砂埃を巻き起こさせると、さらに空也は空を蹴って砂埃が舞い上がっていないところまで行く

「さてと・・・今のうちに逃げよ」

そう言って空也はその場から離れた。空也が離れた後の人間たちは

再び殺しあいを始め、数分後には屍しか残っていなかった。

「帝竜……みいつけた」

口元をゆがませながら空也はそう言った。空也が隠れているごみ箱の中から除く景色には、無防備に眠っている帝竜……スリーピーホロウにゆっくり近づくと、その頭に稲光を突き刺そうとしたが、その瞬間、空也の視界が一瞬揺らぐ

「つく……やべ……」

そして、スリーピーホロウが起き上がると、羽をはたかせながら桃色に近い色のりんぷんを巻き起らせ、

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
! ! ! ! !」

吠え声を上げる。

「
ぐ
・
・
・
・
が
あ
・
・
・
・
」

スリーピーホロウのりんぷんを吸い込んでしまった空也は、頭を抱えてその場に座り込んでしまう。その隙に「この場は危険だ」と本能的に察知したスリーピーホロウは空を飛んで逃げてしまった。

「ぐぎぎあぁぁ」

奇声のようなものを上げながら空也はその場にぶっ倒れる。その瞬間、空也はとある光景を見た

『××！！こいつを使え！！』

『ありがとうございます××さん！！！行くぞ・・・超××！！』

ドラマの刑事が着るような服を着た女が、赤色でクワガタに似た戦士に鉄パイプを投げ渡し、クワガタに似た戦士は何かを叫びその身体を青色に変化させ、どこかへ向かって行く・・・そういう光景だった

SECOND DAYS 2 (後書き)

×で隠したけど意味ない・・・

SECOND DAYS 3

空也がその場に倒れてから数分・・・意識が少し回復した空也の周りには、中年で眼鏡をかけ、帽子を頭にかぶっていて、コートを羽織る男性がいた。その男性は、空也を見ながら何かぶつぶつ呟いていた

「おの・・・・・・・・き・・・のせいで・・・・・・・・に現れるはずのない・・・・・・・・現れてしまった・・・・・・・・この・・・・の・・・・なら・・・・・・・・を・・・・・・・・しれない」

そしてその男は歩き去り、あとは空也だけが残っていた。しばらくすると空也は起き上がり、周りを見回す

「なんなんだろうな・・・あのおっさん」

どうやらフラッシュバックした記憶は覚えていないようである。そして空也はあることに気付いた。すぐに気付けよby作者

「おい・・・帝竜いないぞ！？どうすつかな・・・」

空也は頭をかきながらしばしの間、思索すると、その場から少し走り、とある廃ビルに入り、屋上に行った。そこで空也は周りを見渡すと、何かを発見したのか建物の壁を、パルクールと呼ばれる技術でわたると、空也が何かを発見した場所・・・・ずばりまた寝ているスリーピーホロウを見つけると、その横で抜刀し、構える。

「奥義・・・・・・・・」

そしてスリーピーホロウを一回すれ違いざまに切り裂き、方向転換し、刀の持ち方を変えてまた切り裂く。それを何回も繰り返し、スリーピーホロウにダメージを与える

「乱れ散々桜」

そして、宙返りをしてスリーピーホロウの頭に日本刀を突き刺す。宙返りしながら日本刀を引き抜き、引き抜いたと同時にスリーピーホロウの頭から大量の血が吹き出る。

「HYAAAAAAAAA!!!!!!」

スリーピーホロウは叫び声をあげ、その場から飛び去って行った。それを見た空也は

「は・・・ハハハ・・・これでいいか・・・そのうち死ぬだろう。結構深い所までつきさしたし。ま、糞みたいな死にざまを、おがみに行つてやりますか」

そう言うとき空也は手近な建物の壁にひつくと、そこからまたパルクールで、スリーピーホロウが飛んで行った方向へと急ぐ。

「ッハ!!!! いい死にざまだぜ!!」

空也が見たのは、無様にも脳髓のようなものを緑色の液体と共にだらしなく流し、口からは舌が飛び出ているスリーピーホロウの死骸

があつた。それを見ながら、空也はあざ笑つと、モミジ討ちでスリ
ーピーホロウの死骸を燃やしつくした

「つぎは・・・決めたぜ!!! Chinese!!!」

中国へと向かうことに決めた、空也だった

SECOND DAYS 3 (後書き)

勝因 空也が脳天を突き刺したこと。むしろあれで死なないドラゴン達は強すぎる

あっさりすぎたな

SECOND DAYS ANOTHER SIDE (前書き)

はい、今回はある意味説明です。使いまわし？いえいえ、聖夜です

SECOND DAYS ANOTHER SIDE

朝霧空也がスリーピーホロウを倒したのを、地球が無数にある空間から見ている者がいた。漆黒の黒い長髪を持ち、服は半袖半ズボンという至って普通な少年がいた。しかし、放つ威圧感は近くに居る者を圧倒し、飲み込むほどの者だった。

「地球の記憶持ちとは・・・驚きだぜ」

創造神・・・空刀聖夜はそう言いながらホログラムのようなキーボードを動かし、ある物を作っていた。それはUSBメモリを少し巨大させたような物であり、音声を出すところの下には「B」と書かれていた。もうひとつの方には「G」と書かれていた。聖夜はキーボードを消すと両方手に取り、ついているボタンのようなものを押す

『BLIZZARD!』

『GOD!』

ブリザード・・・吹雪の記憶を宿した『ガイアメモリ』であり、使用者の身体能力を上昇させ、氷の力を操る能力を与えるガイアメモリである。その力はアイスエイジのメモリなど比較にもならないくらい強いものである。

そして、Gのメモリ・・・気づいている方も居るだろうが、神の記憶を宿したガイアメモリであり、身体能力を格段に上昇、さらに五元・・・つまり火、水、土、風、霊の力を使用者に与えるガイアメモリである。しかし、二つのガイアメモリは癖がありすぎ、Bのメモリはまだ普通に適合するくらいだが、Gのメモリは真の適合者

にしか反応しないのだ。何故聖夜が反応したのかは、神だからである

「ま、さしずめあいつの身体に宿っている・・・いや、日本刀の方に力が宿っているんだぜ・・・」

聖夜はそう言いながら静かに青色と金色の・・・『ロストドライバ』を取り出すと、青色の方にBのメモリを、金色の方にGのメモリを同封すると、そのまま某スキマ妖怪が使う、スキマに入れると、不意に炎の弾丸を撃ち込む

「いるんだろ・・・八雲、ばればれだぜ」

「あら？気づいてたの聖夜」

スキマから半分だけ身体を出したのは、賢者とも言われる幻想郷の作り手『八雲 紫』だった。

「はあ？あんなに気配出してたんじゃ普通にばれてるんだぜ」

「いや、貴方気配というか直感でしょう」

「わるかつたんだぜ」

「貴方・・・その『だぜ』変よ。魔理沙が真似してるのは貴方のせい？」

「さあな」

この空間、入れるのは神・・・それも主神、ゼウスやオーディン、トール、シヴァなどしか入れないが・・・紫や邪神など、聖夜が許

容している存在に関しては普通には入れらしい。

「ま・・・しばらく暇でもつぶしているんだぜ」

「趣味悪いわね・・・貴方なら世界をいくらでも捻じ曲げることができるのに・・・」

「それは意味がないんだぞ紫・・・その世界の人間にやらせるからこそ意味があるんだぜ」

「ま、幻想郷じゃないからいいかしらね。では、また今度」

「一生くるな色気しかねえ年増」

聖夜は悪口を言うと、またモニターのような物に向き直る

「楽しませて貰うぜ・・・五条空也・・・期待しているんだぜ」

SECOND DAYS ANOTHERSIDE (後書き)

聖夜・・・言葉に最後に、台詞の最後に必ず「だぜ」がつく。ニユ
アンスがおかしくても

THIRD DAYS

空也は乗り捨てたジェット機をまた使い、中国まで飛んでいる途中だった。しかし・・・

「うおおお！？あのドラゴンめ・・・乗り捨てるしかないのか！？」

そう言いながらも空也はドラゴンの追撃をよけようとするが、空也自身が操縦の仕方を知っている程度のレベルなので、避けようにも避けられず、あえなく撃墜された

「うわああああ！！！！！！」

そう叫びながら空也は突如吹き荒れた突風に運ばれ、中国ではなく香港へと落ちて行った

「我は聞きたいことがあるのだが・・・」

「僕もです」

「おいおい、何でこうなってるんだよオ？」

上から数えると、高圧的なしゃべり方をしているのが、慈円じえんえんき炎忌、敬語のような口調で話しているのが蛇川へびかわらんた乱太、某第一位に似た口調

で話すのが、狂音瞬である

「はあ？俺はただ中国じゃなくて香港へ飛ばしただけだぜ？」

「何度も言っただけだ、我等は世界に干渉してはいけないのだぞ」

聖夜がそう言うのと、炎忌はそう咎める。さらに、瞬がうんざりしている顔で炎忌に言う

「おいおい、お前はその口調をなんとかできねえのかア！」

「我を愚弄するのか？そんなに死にたいのかこの塵芥は」

瞬がうんざりというと、同じように怒り始めた炎忌はそう言いながらロストドライバーとG・・・ジェノサイドのガイアメモリを取り出していた。瞬もサメ・クジラ・オオカミウオの3つのメダルが入った円形の物・・・ポセイドンドライバーを取り出していた

「二人ともやめましょうよ・・・」

おろおろしながら乱太がそう言うが、二人はそれぞれのベルトを腰に巻きつけた

『GENOCIDE!!』

「「変身！」」

『サメ！クジラ！オオカミウオ！』

『GENOCIDE!!』

炎忌の方は血のような赤色の装甲が身体に張り付き、その姿を、ジョーカーを血のような赤色に塗りつぶしたライダー・・・仮面ライダージェノサイドへ変身した。一方の瞬は頭がサメのような頭で、肩には左から右へクジラを模したような飾りがある。胸板辺りにサメ、クジラ、オオカミウオの紋章があり、腰には赤い、オオカミウオを模したような腰当てがあり、上半身は青、下半身は赤に彩られたライダー・・・仮面ライダーポセイドンへと変身した

「まったく・・・俺がとめなきゃいけないんだぜ・・・」

『GOD!!』

「変身」

『GOD!!』

聖夜があきらめたような口調で言うと、金色のロストドライバーにゴッドのガイアメモリを装填し、右に傾け、その身体に金色の装甲が張り付いていく。聖夜が鎮座していた王座に居るライダー・・・エターナルのメモリスロットをそのままに、白色のところを金色に染め上げ、青い炎の模様を銀色にし、複眼が青いライダー・・・仮面ライダーゴッドへと変身した

「あわわわわ・・・」

乱太はそう言いながら避難し、3人のライダーによるミニライダー対戦が怒っていた

そのころ、空也はなんとか香港の一番高いタワーに着地していた。ほとんど骨が折れていないところを見るとやはり人間離れしているといえよう

「おう？何で暗いんだろうな・・・かるうじて明かりはあるけれどもなあ」

空也はそう言っで、その場から飛び退いた。その瞬間、

ドガガガガガッ！！！！

「あいつは・・・ザ・スカヴァーか！？」

空也自身も名前があっさり出たことに驚いていたが、そのでかさは異常で、軽く何キロメートルもありそうな胴体を持っていた。ザ・スカヴァーが通り過ぎた後には何も残っていなかった

「あんなのとやりあわなくちゃいけないのかよ・・・」

THIRD DAYS 2

「あんな帝竜・・・どうやって倒せばいいんだろうな・・・住処を暗くする・・・光が苦手か。でもそんな光、よっぽど強力な光源がないと出来ないしな・・・」

空也はそう考えながら、その場のがれきに座り込む。その刹那、空也は飛び退くと、空也がいたところには青い斬撃のような物が通過していた。避けていなければ一発で死んでいただろう

「誰だ」

「おオ、良く出来ましたア」

問いかげにこたえたのは、白髪で目が赤い青年・・・狂音瞬であつた。赤い槍にもたれかかりながら面倒くさそうな目をしていることから推測すると、おそらく無理矢理行かされたのだろう

「無論、あんな攻撃避けられなきゃなア、この国の帝竜も倒せねえよなア。この国の帝竜を倒す鍵・・・それは発電所を再稼働させりゃあいい。せいぜいがんばりな」

「・・・すまない」

「何、俺も無理矢理行かされた口だからなア。お前はあの聖夜が目置いてる奴なんだよ。俺から言えるのはこれだけだ。じゃあな」

瞬はそう言つと槍で空を切り裂き、作り出された裂け目をくぐり抜

けてどこかへと去って行った。空也は無言でこの国の発電所らしきものを探すため、走り出した。

「ハア・・・ハア・・・ぶっ通しで走ってるからな・・・それにしても見つからない・・・電線っぽいものたどればって・・・地下ケールとかもあったよな・・・」

そう言いながらも空也は稲光を地面に立てると、倒す。倒した方向が指し示したのは、真横。空也は稲光を拾うと真横を向いて走り出した。

「やつぱり・・・ついた」

どうやらあのあてずっぽうな行動でついてしまったらしく、ここでもチートぶりがうかがえる。そして、空也は発電所へと踏み込んだ

「おい、きちンと俺は伝えてきたぞ」

「分かったんだぜ」

瞬がそう言うと、聖夜が作業をしながら適当に返す。それにあきれたのか瞬はその場から消え去る。それを一瞥すると、聖夜はため息をつく

「鹿目まどか・・・円環の理・・・人から神になった存在・・・あの子ならこの世界を元通りに出来る・・・かもな」

そう聖夜は呟くと、またその場から消え去った

空也は発電所で電気を復活させるはず・・・だったが、地下に迷い込んでしまい、驚愕の物を見てしまった。それは

「むごい・・・な」

とある記録。そこには “HOMURA AKEMI” と記されていた。それを読み進めると、さらに 円環の理 “MADOKA KANAME” や “SAYAKA MIKI” などとも記されていた。さらに読み進めると

「バマミが死ぬことになった魔女、“シャルロッテ” 美樹さやかが魔女化した存在 “人魚の魔女” その戦闘で死ぬことになった “佐倉杏子” 最強の魔女・・・ “ワルプルギスの夜”・・・写真もある。誰が撮ったんだ？しかし、人間がいなくなった今じゃ、ほとんど・・・いや、今現在の状況をみると、そうでもないようがな」

空也は現在進行形で、自分が今見たデータの中にある・・・薔薇園の魔女の手下の1つ、『警戒』の役割を持つ手下であり、蝶の羽を持ち髭を持っていた

「さあてと・・・殺しあおうぜ!」

FILING この世界（前書き）

今回は小説の世界についてまとめてみました。年号も出してみました

FILING この世界

この小説の世界を簡単に説明すると、最初は『魔法少女の世界』で、空也がこの世に生まれたあたりから、『セブンスドラゴンの世界』へと変化。ライダーの世界でもないのでディケイド、紅渡も知らず。

ここからは年表です。だいたいこの世界と技術は変わりません

2000年 20世紀から21世紀へとなった。このころからこの世界のインキュベーターが宇宙の寿命を延ばすために活動開始。

2001年 日本のX市で大火災事故 死亡者だけでも200人に及び、重軽傷者が100人で、無傷で救助されたのは当時11歳の少年だけだった

2002年 国際テロ組織『endless』がアメリカ・ハワイトハウスを爆破。これにより当時の大統領や政治家が死傷者合計で20人いた。このテロ組織はまだ捕まっていない

2003年 新たなエネルギー、光子力理論が立証されたが、当時の学界は実現不可能として、立証した科学者を学会永久追放とした
2004年～2008年 この時期にとある病原菌が大流行。世界全体で見ると3億人が死亡。4億人が後遺症を残した

2009年～2019年 聖夜がこの世界に介入開始。それと同時に鳴滝が一時この世界に潜伏、その後別の世界へと渡る

2020年 魔法少女まどか マギカの本編開始、暁美ほむらが時間を繰り返した回数は少なくとも20回、聖夜が気付くも黙認。そしてまどかが円環の理となり、世界が再構成される。聖夜はそれを少し手助けした

2022～2030年 炎忌、乱太、瞬が聖夜の仲間へとなる。また、この間にほむらは本編の魔法少女記録をまとめる。

2031～2090年 この間に人類は大きく進歩、タイムトラベル理論やコズミックエナジーなどの理論を確立し、太陽系外へと進出する。さらにドラゴンの進行を予想し、とある計画を2090年に実行する

2091～2099年 聖夜とまどか接触

2100年 本編開始。人類滅亡の危機と共に朝霧空也が力を得る

THIRD DAYS 3

「多すぎるんだよ!!!」

空也は言いながらも使い魔を斬り倒し、攻撃をよけながらそう叫んだ。使い魔は倒しても倒しても無尽蔵に出てくる。

「（本来魔女はいないはず・・・だよな。なら何故だ？）」

冷静に推測を立てるが、その間にも攻撃は続く。それをよけながら攻撃していると、一つの画面が空也の目に入った。その画面があるところに空也は転がりこむと、画面にある文字の羅列を読み始めた。

『この世界mまどかが守り切ったこの世界を。私は守り抜きたい』

「（これは・・・曉美ほむらの記録・・・）」

『私はこの時間軸のあの一カ月の出来事をここにまとめた。そして、まどかを取り戻すための研究を1年間続けている間にも魔獣との戦いは続けていた。でも、そんな生活からか病気にかかって、今これを書いている時点では余命は3カ月。私はこれから起きる出来事をここに記すわ』

「・・・なるほどね」

空也は読みながらも近寄っている使い魔を蹴散らすと、また読み始めた。

『これから起きる出来事、多くは記せない。でも、少しなら記せる。2090年の間に、キー計画というものが発動される』

「キー計画・・・当時200億人に膨れ上がり、パンク寸前だった人類の中の160億人を応募で各国が選出し、最先端技術で作り出された宇宙船に乗り込み、宇宙の新天地を目指す計画・・・参加者は今もコールドスリープで眠りにについているか・・・おじやんか・・・新天地を手に入れたか」

空也の説明の通り、2011年でこの世界の人口は70億人・・・79年の間に発展途上国、先進国が子供を増やしたために人口が膨れがあり、食糧不足にまで落ちいった時に発案された計画で、各国が人間を選出し、合計が160億人の人類を宇宙船に乗り入れてコールドスリープで眠らせ、新天地を目指すという計画だった

「何故・・・知っている」

そう、2020年くらいに生きていた曉美はむらが地球に残っていたとしても、2090年には90歳や100歳くらいになっている可能性もあるのだ。しかし、余命は3カ月と言っている事と、魔獣と戦っていることから推測して恐らく15歳の可能性が多いと空也は推測していた

『その計画の真意は、大を助け小を切り捨てる・・・2100年に襲来するドラゴンのことを予期した各国首脳が作り出したこと。つまり、残りの40億人は地球という牢獄に捕らわれた生贄よ』

「なるほどな・・・」

ギリリ、と歯ぎしりをしながら使い魔達を全部殲滅すると、空也は

稲光を鞘にしまう。そして、本腰を入れて読み始めた

『それに気付いた私はここにこうやって記した。それを教えてくれたのはこの時間軸。いえ、創造神 空刀聖夜とまどかだった。まどかは未来からやってきたと告げ、私にこの事をすべて教えてくれた。しかし、これを世界に伝えるには私の命が少なすぎた。そして、ここにこの記録を隠し、余生をまどかと共に過ごすことに決めた。これでこの記録は終わる・・・でも、2100年に生き残ってこれを見ていたら、これを使ってほしい』

それと同時に画面に備え付けられていたパネルから一つの宝石が出てきた。それは淡い輝きを放っている黄色い宝石だった

『これは空刀聖夜からもらった物・・・これを見たあなたの役に立つはずだわ。貴方はこの地球の希望。だから・・・ドラゴンなんかに負けてはだめよ。絶対に』

空也はそれを読み終わると、黄色い宝石をひつつかんでポケットに無造作に入れる。その目には何か、色が戻っているような感じがしていた

THIRD DAYS 3 (後書き)

ちなみにこの記録を書き残したほむらは本編終了の1年後であり、その間に魔獣討伐、研究を両立していた無理がたかつて不治の病にかかり、余命である3カ月を聖夜とあつた未来のまどかと過ごして、死亡したという設定です。ほむらファンの皆様すみません

THIRD DAYS 4

「んで……何の用なんだだぜ」

『うん……ほむらちゃんがいたあの世界……あんなことになっちゃったんだね』

「ああ。ま、希望の160億人がいるけどな。空也はその真実に気付くか、て言うところだ。決めては、だぜ」

『その「だぜ」っていう口調なんかならないかなあ?』

「ま、なんとかならないということを書いておくんだぜ」

とある空間にて、再び、空刀聖夜と円環の理《鹿目まどか》が邂逅した

「んで……ここが発電システムを再起動させるキーか……」

2011年の文明と2100年の文明は大きく違う。火力、水力、原子力などに頼っていた2011年とは違い、2100年では空気中の窒素を取り込み、発電させる方式が作られていた。スイッチを入れれば再び動き出すはず……と空也は推測した

「スイッチ、オン。ってな」

そして、空也はスイッチを入れると同時に発電システムが再起動した。それを示すかのように辺りの画面が点灯した。そして、その画面に数字の羅列が浮かび上がり、羅列が消え去ると、画面には変な紋章が浮かび上がっていた。

「また……魔法少女……って、タイムマシンまで作られていたのかよ……過去を変える気はしないがな」

そう言うと、空也はその場から立ち去って行った。そして、外に出ると街頭がともり、少し歩くと身悶えるザ・スカヴァーがいた。この帝竜は光に弱く、豆電球程度の電気でも少し動きが鈍くなるほどだ。しかし、人間にとつての鈍いとは違い、今の状況でも他の帝竜と変わらない強さを持っているが

「さあてと……どたま、ぶつち斬るぜ!!」

空也は開口一番、稲光を抜刀し、頭めがけて袈裟切りを使用し、切り裂こうとしたが目の前にザ・スカヴァーの尾が有り得ない速さで迫り、尾の打撃が当たる前に空也は回避、そして一回離れる

「でかい癖に動きが早いな……なら……」

ギョオ、という風の音が鳴ると、ザ・スカヴァーの近くにいつの間にか空也がいて、鞘にしまわれている稲光を少し抜刀すると、目にも見えない速さでザ・スカヴァーの尾を切り刻んだ。そして稲光を鞘にしまうとザ・スカヴァーの尾が何連続も切り裂かれ、使い物にならなくなるくらいにぼろぼろになった。

「GYAOOOOOOOOO!!!」

ザ・スカヴァーはそう吠えるとその場からはいずって逃げようとしていた。しかし、もはや使い物にならない尾が邪魔をして、移動のスピードを遅くさせる。空也は一気に近づくところ、ザ・スカヴァーの背中に乗つくと、一気に稲光を突き刺す

「GYAAAAAAAAAAAA!!!」

ザ・スカヴァーは叫び声をあげると、空也を乗せたまま横へ大きく揺れる。それを見逃さずに空也は稲光を引き抜き、頭部まで移動するとザ・スカヴァーの首に日本刀をあてる。

「大門オロシ・・・横バージョン」

一閃、それだけでザ・スカヴァーの生命は終わりをつけた。頭部はくるくる回りながら地面に落ち、雲が無くなり、太陽が現れた途端に融けて消えた。尾や胴も同じように溶けて消え、残っていたのは牙だけだった。その牙を手にとると、

「いらねえな」

と、空也は放り投げようとしたが、その手を誰かがつかんだ

「誰だ」

「いえ・・・その牙を捨てると後々厄介なので捨てないようにしているだけです」

緑髪の男・・・蛇川乱太はそう言つと空也の手を離す。空也は仕方

なく牙を懷にしまいながら問いかける

「んで・・・次の帝竜の居場所は？教えてくれるんだろ」

「鋭いですね。次はバチカン市国にでも行ってみたらどうですか？死と生の境界があいまいになっているみたいですから」

「分かった・・・後、この世界は狂っているのか？狂っていないのか？」

空也の問いかけに乱太はしばし、考え込むとやがて口を開いた

「さあ・・・ボクは神様ではありません。それに、神様でも分かりませんよ。暁美ほむらの事がかかわっているんでしょう」

「良く分かったな」

「いえ・・・彼女は紆余曲折ありながらも、幸せになった。それでいいじゃないですか。では」

「ああ・・・変な事を聞いてすまなかった」

そう言つて乱太はその場から描き消えた。空也はそれを見ると、振り向いて歩き出した

THIRD DAYS 5 (前書き)

あえて言いましよう・・・次章は聖夜達本格的にからませる目的・・・
・あとハッピーエンドなしは人類目線で、空也目線にはハッピー
エンド近いです。あ、ネタバレやん

THIRD DAYS 5

「バチカンまでどうやって行くかな．．．」

ここからバチカンまで行くのは相当な距離があり、歩いて行くのは一カ月近くかかってしまうはず．．．そう空也は考えると、また適当なバイクを盗み出す．．．ということ考えたが、海をバイクで越えていくのは無理だと悟り、落ち込んでいるところであった

「あゝあ．．．ま、適当な船を奪うかな．．．」

そう言っていると、駆け出すが、不意にその足が止まる。

「．．．．．誰もいない．．．のか？」

しかし、空也は止まることなく走り出した。その走り去っていく後ろ姿を見ていた人間．．．慈円炎忌は自分の持つジェノサイドのガイアメモリと、Kと書かれたガイアメモリをそれぞれの手で弄びながら気配を消してみていたようだ

「ふん．．．我の気配に気づかぬとはなんという狼藉者だ。だが、我は優しいから見逃してやるか」

そう言い残すと炎忌はその場から消えた。

「こんなのでいいか。燃料も満タンだし」

空也は自分の中にある記憶を探ると、船などに関する知識が入っているのを確認したうえで船を選んだ。燃料やエンジンの状態を考慮した上で、だ。そして船のエンジンをかけると（船のキーを壊してエンジンをかけた）そのまま海の向こうへと乗って去っていく。次の国、バチカン市国へと続く国へ

「へー、あいつバチカン行ったのか・・・あそこ嫌いなんだぜ」

「それよりも真面目に考えてください。プレ〇テ2で・h a〇kやらないでくださいよ・・・」

聖夜は某テレビゲーム機で某映画化したゲームをやっていると乱太からあきれ半分の声で言われた。聖夜はそれを聞くと、ゲームを一旦中止した後、乱太に向いた

「だからお前はいつまでたってもへぼ川へぼ太なんだよ」

「無理矢理すぎますよそれ！！？」

さて、シリアスとメタイ事を言いながら聖夜がゲーム機を消すと、空也を見ながら一つの石・・・霊石アマダムを取り出していた

「あいつの体内から出したアマダム・・・あいつ、前世のクウガの力がそのまま残っている口なんだぜ」

「なるほど・・・僕のオルタリングと同じようなものですか。とりあえずそれはまだ出さないほうがいいと思います」

「ああ、まだ時期じゃない。こいつは帝竜全てを殺した後に渡す。そして・・・その時に、この世界のすべてを話すんだぜ」

そう言うのと聖夜は消え去り、乱太はアギトルネイダーにまたがってその場から消えた

THIRD DAYS 5 (後書き)

ネタばっかやん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0400z/>

7TH DRAGON 2020 ANOTHER DAYS

2011年12月17日18時55分発行